

特集

若者はなぜ、浜益に引き寄せられるのか

町 浜益支所地域振興課 ☎79-2029

NPO法人ezorockの取り組み

「RISING SUN ROCK FESTIVAL」の開催に合わせて毎年夏に160人規模のボランティアを募集し、会場内で徹底したごみの「13分別」を行うほか、回収した生ごみを堆肥にして育てたじゃがいもを無料提供したり、未活用の木材を使ったまき割り体験を実施したりするなど、フェスを楽しみながら持続可能な未来をつくる活動を展開しています。



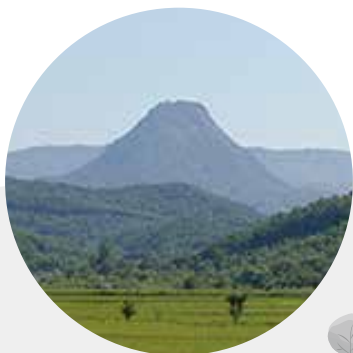
NPO法人 ezorock

ライジングサンロックフェスティバル

2000年に開催された「RISING SUN ROCK FESTIVAL」での環境対策活動をきっかけに、翌年4月に設立された団体。今では多くの若者を巻き込み、北海道各地の課題に対し、若者のアイデアやパワーを届ける事業を展開。その活動を通じて、若者が自らの人生と社会を切り開く機会も作り出しています。

ezorock×浜益 | 17年の歩み

- 2009年 ● 農林水産省が実施する“田舎で働き隊！”の受け入れ先として、都市部の若者を募って、初めて浜益を訪問
- 2015年 ● 「巨木ツアー」と題して千本ナラなどを訪問。この時点で地域の方との交流はまだない
- 2016年 ● こどもの自然体験のフィールドとして訪れ、浜益の方とつながりが生まれ始める
- 2017年 ● 福島のこどもたちを受け入れるツアーを浜益で開催。その中で地域のさまざまな業種の方がそれぞれの強みを生かしながらかかわる「浜益版まちたんけん」を実施
● 浜益区内で大雨災害が発生し、ezorockの若者が現地のお手伝いへ出向く
- 2018年 ● 浜益の樹齢1500年の巨木・イチイの木を目指すスノーシューツアーを実施
● 福島のこどもたちを受け入れるツアーの2回目を実施
- 2019年 ● 空き住宅(旧助役宅)を借り受け、「はまますベース」が誕生
- 2020年 ● コロナ禍で疲弊する都会の若者を支援するため、浜益の協力を得て浜益米1tを送るプロジェクトを実施
- 2021年 ● 市・民間企業・ezorockの三者連携でワーケーション実証事業を開始。遊休公共施設の活用を検討する
● 「集落の教科書」制作開始→2022年完成!
- 2023年 ● 浜益内外の人が一緒に学ぶ「浜益夜学」を開催
- 2024年 ● 「雪どけのさくらんぼ」の販売
● 浜益わかもん会・浜益支所と共に住民の対話の場「いっぺかだれやの会」開始
- 2025年 ● ヒグマ注意報を機に、市民勉強会「ヒグマフォーラム in 浜益2025」を開催



福島の子供たちを受け入れるツアー

東日本大震災で被災した子どもたちに外で自由に遊んでもらおうと、コープさっぽろが企画し、ezorockが運営を担当。子どもたちが地域を巡る「まちたんけんウォークラリー」では、農家や漁師の方から、浜益支所の職員、スナックのママまで、地域のさまざまな業種の皆さんの協力によって実施することができました。



ロックフェスの恩返しから生まれた絆。 若者と浜益をつなぐ「関係人口」の可能性

NPO法人ezorockが、浜益にあった空き住宅を借り受け、活動拠点「はまますベース」を立ち上げたのは2019年のこと。今、そこへ多くの若者たちが足を運び、地域の人々とさまざまなつながりを結んでいることをご存じでしょうか。

そもそも、なぜ舞台が浜益だったのか——代表理事の草野史生さんは語ります。「一言で言えば、浜益が石狩市の中でもとりわけ人口減少の進む地域だったからです」

ezorock誕生のきっかけとなった「RISING SUN ROCK FESTIVAL」は、今や全国から人が集まる一大音楽イベント。

「このイベントが開催できるのも、ひとえに石狩市民の皆さんのご理解があつてこそ。だから、その恩返しとして私たちは『フェスティバルをきっかけに集まってきた若者と共に、石狩のためにできることはないだろうか』と常に考えてきました。その思いが結実したのが『はまますベース』の取り組みです」と草野さんは力を込めます。

実は、ezorockと浜益にはすでに接点がありました。2017年、東日本大震災で被災した子どもたちを道内で受け入れる企画の際、浜益の農家や漁師の方から、支所の職員、スナックのママまで、地域の方が総出で子どもたちの受け入れに協力してくれたのです。草野さんは当時を振り返ります。

「浜益の一体感に、本当に驚きと感動がありました。このご縁を機に、浜益が大雨に見舞われた際のお手伝いや、冬のイチイの木を巡るスノーシューツアーなど、現地で活動が次第に増えていきました」

そして、活動を通して草野さんの目に映ったのは、人口減少が進み、一人でも役目もこなしながら必死に地域のために活動する浜益の人々の姿でした。その姿に心を打たれ、「この地で『関係人口』を増やしたい」という強い願いが芽生えていったと言います。

関係人口とは、その地域には暮らさずとも、地域住民とともにまちづくりに関わる「観光客でも定住者でもない、対等なパートナーとも言える存在」のこと。草野さんは強調します。「浜益の人口は現在約940人。5年前に比べて200人以上減少しています。どうしても減ってしまった分を、関係人口で補っていければ、そのつなぐ役割を担っていきたいと思っています。実際に、浜益の皆さんと一緒に作った地域ビジョンにもそれが明記されていて、今まさにキックオフの段階です」

「はまますベース」を核に活動が広がる中、ターニングポイントとなった取り組みがありました。それが「集落の教科書」の制作です。

↓4ページに続く